氏　名（本　籍）　廣　瀬　幸　生（京都府）

学位の種類　文　学　博　士

学位記番号　博　乙　第 234 号

学位授与年月日　昭和60年3月25日

学位授与の要件　学位規則第5条第2項該当

審査研究科　文芸・言語研究科

学位論文題目　REFERENTIAL OPACITY AND THE SPEAKER'S PROPOSTIONAL ATTITUDES
（指示の不透明性と話し手の命題態度）

主　査	筑波大学教授	文学博士	安　井　　稔
副　査	筑波大学助教授	Ph.D	中　右　　実
副　査	筑波大学助教授	Ph.D.	原　口　庄　輔
副　査	筑波大学教授		島　岡　　丘
副　査	筑波大学助教授	文学博士	古　川　直　世

論　文　の　要　旨

本論文は，現代英語におけるいわゆる指示の不透明性をめぐる種々の現象を取り上げ，その現象を統一的に記述し説明するための独自の意味理論的枠組みを提唱し，そしてその枠組みを十分な経験的根拠に基づいて論証したものである。

指示の不透明性とはどういう現象を指して言われるか，これをみるために，まず，(1)の文がある。

(1) a. The first president of the U.S. was an honest man.

b. The first president of the U.S. was George Washington.

c. George Washington was an honest man.

ここで（1b）が真ならば，（1a）は（1c）のように言っても，その真理値は変わらない。すなわち，「アメリカ合衆国初代大統領はジョージ・ワシントンである」ということが事実として与えられたとすると（そしてこれは歴史的事実である）。「アメリカ合衆国初代大統領は正直者だった」というのは，「ジョージ・ワシントンは正直者だった」というのとまったく同じことを言っていることになる。このような置き換えの関係が成り立つとき，（1a）の主語の位置は透明なコンテクトであり，その主語は指示が透明である（referentially transparent）と言われる。

これとは対照的に，このような置き換えが必ずしもきかない場合がある。たとえば，次の（2a）で補文主語がそれである。

(2) a. John believes that the first president of the U.S. was an honest man.

b. The first president of the U.S. was George Washington.

c. John believes that George Washington was an honest man.

ここでは，(2b) が事実として与えられたとしても，(2b) から (2C) を導き出すことは必ずしもできない。というのは，補文の中身は主節の主語の信念世界の問題だから，「アメリカ合衆国初代大統領はジョージ・ワシントンである」ということが事実としても，そのことをジョンが知っているとは必ずしも言えないからである。したがって，こういう場合に believe の補文は不透明なコンテクスト (opaque context) であると言われ，そして不透明なコンテクストのもとでは，透明なコンテクストの場合のような置き換えは必ずしもきかず，原理的にはあいまい性が生じるということになる。

こういった現象を扱う指示の不透明性の問題は古くて新しい問題である。元を正せば，言語哲学の分野に端を発し，それが変形文法理論の進展とともに，改めて言語学者の注目を引き，理論言語学的な観点から新たに光が投げかけられたのである。そして今日に至るまで，多岐にわたる接近法が試みられてきた。しかしそれもいくつかの類型に大別される。注目すべきものとして，Hasegawa (1972) によって代表される「話し手・対・主語」(speaker vs. subject) 理論，Postal (1974) によって代表される作用域理論 (scope theory)，そして Jackendoff (1975) のイメージ理論 (image theory) がある。その上に，たとえば Horn (1981) のような語用論的接近法を加えることもできる。

しかし，これらどの接近法にも共通した問題点がある。まず第一に，資料の包括性に問題がある。本論文の著者が本文のいたるところで指摘しているように，指示の不透明性に決定的にかかわる文法現象がいくつも完全に欠落している。しかもそういった現象は，これまでその理論的意味合いはもとより，その存在すら気づかれたことのない類のものである。そして第二に，まさしくこの資料の断片性のゆえに，どの既成の理論も経験的な妥当性に大きく欠けるところがある。したがって当然，指示の不透明性の現象を統一的に記述し説明するための理論的枠組みとはなっていない。これに対し本論文の提唱する理論的枠組みは，これら二点において，既存のどの理論をも超えていることは疑いを容れない。つまりは，指示の不透明性をめぐるさまざまな問題に対し最も妥当な説明を与える統一理論になっていると言うことができる。

指示の不透明性の問題に統一的な答えを与えるためには，著者のみるところ，次に示すような，大きく三つの問題がかかわり合ってくる。

(3) とりわけ動詞の補文に見られる指示の透明と不透明の区別はどういう性質のものか。

(4) 動詞とその補文との間に内在する意味論的関係はどういう性質のものか。

(5) 「瞬間的現在時における話し手の心的態度」としてのモダリティが動詞補文に対してもつ意味論的効果はどういう性質のものか。

これら三つの問題の間には有機的な関係がある。とりわけ(3)の問題を解明するためには，(4)と(5)の問題を解明することが必要不可欠である。言い換えれば，(3)に関する妥当な理論は(4)と(5)の理論

に組み込まれた情報を利用しなければならない，ということでもある。本論文の中心課題は，このように，これら三つの問題の間に有機的な関係があることを示し，そしてそれに見合った明示的な理論を構築することである。

そしてその理論的枠組みはTモデル（T-model）と呼ばれる。このように呼ばれるのは，下位理論間の相関関係がアルファベットのTの文字を形造るからである。その下位理論は三つの独立した意味理論からなり，それぞれ，(3)から(5)の問題に対応している。(3)の問題に含まれる性質は「透明・対・不透明の理論」(theory of transparent/opaque distincitions）として定式化される。次に(4)に含まれる性質は「話し手の命題態度の理論」(theory of the speaker's propositional attitudes）として規定される。また(5)の性質については，すでにNakau（1979;1980a,b;1981c）によって提唱されているモダリティ理論（theory of modality）を基本路線とし，それが自然発展的な形で援用される。

そして最後に，これら下位理論間の相関関係を捉える仕組みとして，「整合性の原則」（compatibility principle）が特定化される。この原則は，要するに，フィルターとしての働きをするもので，平たく言えば，(3)の理論が自分勝手に見境なく突っ走ってしまうのを，(4)と(5)の理論があらかじめ食い止めるのである。かくしてTモデルは，三つの自律的下位理論と一つのメタ原理から成る一大意味理論体系を形造り，これによって，指示の不透明性にかかわる複雑な言語現象が十分に明示的な形で説明される理論的基盤が与えられたことになる。

本論文の構成は，序論と五つの章から成る。序論では，論文の全体構造，すなわちTモデルが素描される。第一章では，指示の不透明性とはどういう現象を指して言われるか，その概要が与えられる。第二章と第三章は，透明と不透明の区別に関する理論を構築するのに当てられる。まずはじめに，「話し手の解釈する現実世界」と「話し手の解釈するイメージの世界」という概念を基に，「透明の領域」と「不透明の領域」が規定され，そして次に，透明と不透明の区別を解釈する基本的枠組みが設定される。さらに加えて，従来の分析が批判的に検討され，問題点が指摘される。その結果，これら二つの章を通じて，ひとつには，透明と不透明の区別を適正に特徴づけ記述することができ，またひとつには，補文命題に対する話し手の命題態度こそ，透明と不透明を区別する最も重要な意味要因であることが明らかにされる。

第四章は本論文の中核部分を成すもので，補文命題に対する話し手の命題態度についての理論が提示される。さらにはこの理論を，動詞とその補文との意味関係の分析に適用することによって，その理論自体の経験的妥当性が一段と説得力のある形で立証される。そしてまた，この理論は，先にも論及のあったモダリティ理論を必要とすることが示され，これら二つの理論間には密接な関係があることが明らかにされる。この関係を明示的に捉えるものとして，整合性の意味原則が措定される。この原則は，一定のモダリティ表現と動詞補文とのある種の意味関係に対し，原理的説明を与えることも論証される。　指示の不透明性の込み入った現象を説明するためには，ただ，透明と不透明の区別を組み込んだ理論だけでは不十分であって，さらには話し手の命題態度の理論，およ

び中右のモダリティ理論もまた必要であることを示す論拠が，第二章から第四章にわたって，数多く指摘されている。

第五章では，これまでに得られた結論を統合して，指示の透明性の問題を軸とした理論全体の構図を，Ｔモデルとしてまとめ上げる。そして次には，従来，指示の不透明性との関連のもとでよく問題とされてきた現象として，少なくとも表向きは矛盾文としか言いようのない補文があり，それに対しても，この統合理論は適正な分析を与えることが実証され，この理論的モデルの経験的妥当性は一段と強固なものとなったと言える。

審　査　の　要　旨

本論文の最大の特徴は，指示の不透明性という伝統的な問題に対し，どの既成理論よりも包括的で統一的な説明理論を構築したところにある。従来の研究は，どれを取り上げてみても，大きく二つの点で問題があった。ひとつは，分析資料が断片的であって，包抱的ではなかったということ。さらに言えば，それも決定的に重要な現象が完全に欠落している。本当のところは，こういった現象の存在にさえ気づいていなかった，というところにこそ問題の根はあると言わなければならない。これはとりも直さず，そういった現象の存在に気づくことを可能ならしめるような理論的視点がなかったということでもある。このようにみてくると，本論文が，これまで指摘されたことのない新しい資料を数多く発掘し，その理論的意味合いを明らかにしたことは，なによりもまず，高く評価されなければならない。

そして既成理論のいまひとつの問題点は，その経験的妥当性が大きく欠けるところにある。以上述べたように，断片的な資料だけを分析の立脚点としていたために，それに基づいて作られた理論は，当然のことながら，経験的に妥当な理論となりえなかったのである。この点においても，本論文の提唱するＴモデルは，疑いもなく，はるかに優れた包括的かつ統一的な理論的枠組みとなっている。

本論文の第二の特徴として，射程の大きさと発展性を挙げることができる。本論文の理論的モデルは，ただ，指示の不透明性をめぐる現象にとどまらず，広くさまざまな文法現象にまで適用されうる可能性をもつからである。しかしこれは，ここで提唱されている理論的モデルが，現状において，完全無欠であるということではない。基本的枠組みは十分以上に満足できる形で論証されていることは疑いを容れないが，しかしなお，精緻に細部を詰めるという問題は今後に残されていると言わなければならない。

一例を挙げると，話し手の命題態度について，これは大きく四つの類型に分けられることが指摘されており，これにはもちろん，十分に魅力的で説得的な論拠が与えられているが，ここでなお疑問をさしはさむ余地があると思われるのは次の二点である。ひとつは，話し手の命題態度はこの四つの類型で必要十分であるかどうかという点，そしてもうひとつは，I KNOW WHAT の類型だけ

は，その内部構造から推しても，ほかの三つの類型，すなわちI KNOW THAT， I BELIEVE THAT, I DON'T BELIEVE THATと異質なのではないか，という点である。念のために言い添えるが，たとえこれらの問題に否定的な答えが出たとしても，その基本的枠組みを変容させることにならないことは言うまでもない。

一般に，説明力のある明示的な意味理論を構築することは，現在の学問的理解の段階において，なおきわめて困難な状況にあると言ってよく，Jackendoffの一連の研究を唯一の例外として，ほかにその成功例を見い出すことはほとんど不可能である，という見方は十分に成り立つと思われる。こういった視野のもとで本論文の成果をみると，ここでの試みはまことに野心的で，挑戦的で，魅力的であり，今後の意味理論研究に大きく実質的な貢献を果たすことが期待される，と言っても決して過言ではない。

よって，著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものとみとめる。